

## エスノメソドロジー再考

水川喜文

はじめに

エスノメソドロジー (ethnomethodology) が、日本の社会学に紹介されてから [ニシオ；竹中 1969] すでに20年以上経過した。その間にエスノメソドロジーは、Harold Garfinkelを中心にして紹介され、様々に論じられ、最近では単なる紹介や追試ではない事例研究も行われるようになった。しかし、エスノメソドロジーとはいったい何であるのか、一般的な理解があるとは考えにくい。

本稿では、他の社会的アプローチとの対比を行いつつ、エスノメソドロジーが何であり、何を検討することによって生まれてきたのかを示したい。

また、そのことによってエスノメソドロジーと、いわゆる「意味学派」[吉田民人 1978] との差異を明確にしてみたい。一般に、エスノメソドロジーは、現象学的社会学やシンボリック・インタラクショニズムとともに、「意味学派」とひとくくりに言われることが多い。この論文では、同じ現象を二つのアプローチで分析することにより対比し、エスノメソドロジーが「意味学派」ではないことを示し、その特徴を明らかにしていきたい。その際には、エスノメソドロジーのさまざまな立場のうちでも、Harvey Sacks および Harold Garfinkel のアプローチを中心にして、その実証的側面を強調しつつ論じていきたい。

## I エスノメソドロロジーの表層的理解

ここでは、エスノメソドロロジーについての表層的な理解を紹介してこれからの議論の前置きとする。エスノメソドロロジーは、しばしばエスタブリッシュメントへの対抗と見られたり、「実践」のみによって理解できると言われたりした。しかし、こういう局面ばかり見ていては、理論的含意が理解できない。そればかりか、これを表面的に理解して、「エスノメソドロロジーは、既存の理論を批判する社会学の社会学である」としたり、「何でも実践すれば、エスノメソドロロジーになる」などとしたり、全く的外れなことになってしまいかねないだろう。また、エスノメソドロロジーを「人々 (ethno= member) の方法 (method-) の研究 (-ology)」であると定義づけても、methodを「実体的な共同体を前提とした方法=共同体のルール」としたり、「背景の知識の内容」としたり、「行為の前提条件」としたり、ましてや単なる実利的な「ハウツー」と理解したなら H. Garfinkel らの努力があまりにも報われないことになるだろう。

さて、エスノメソドロロジーについての表層的な理解は、一般に次のようなものではないか。

A. Schutz が、行為者の日常世界の構成を分析したのに対し、エスノメソドロロジーは、行為者によって解釈される日常的世界をあるがままに写し取り、行為者の解釈過程を分析する。エスノメソドロジストは、その場面の行為者になりきることによって、「行為者主観」を描き出すことが必要になり、そのためにフィールドワークを行う。すなわち、主観主義を徹底した社会学であり、統計的処理を行う実証主義的な社会学や、社会学者の解釈図式を押しつける「思弁的」社会学などに対して革新的である、と。<sup>(1)</sup>

これを分節化すると、エスノメソドロロジーとは、

- ① <分析対象> A. Schutz の現象学的社会学を徹底化させ、行為者（あるいは、ある集団）の主観的解釈過程、解釈図式を分析・記述する。
- 行為者の解釈過程を分析するという意味で、シンボリック・インタラ

クシヨニズムにも類似性がある。

- ② <分析方法>エスノメソドロジー的調査は、調査者がその場面の行為者（あるいは、ある集団のメンバー）になりきることによって「行為者主観」を描き出す。
- 社会的逸脱者（あるいは、逸脱者集団）の内面分析に効果的である。  
[濱島他 1972: 24]<sup>42)</sup>
  - 場面を混乱させて自明視された常識を暴き出す [加藤 1978a, b]。
- ③ <社会学における位置づけ> T. Parsons の機能主義に対抗し、社会学の「パラダイム変換」を求めるものである。
- 人間の主体性を強調するヒューマニスティックな理論である。

以上のようにエスノメソドロジーが表層的に理解された場合、次のような表層的批判が行われる場合が多い。

- ① <分析対象>当事者主観を徹底すると「主観主義」におちいり、社会学者は、分析ではなく、行為者の解釈をただ単に記述するだけになってしまう。
- 行為者の解釈を追認するだけになってしまい、他の社会学者の判断基準がなく、文学作品のようなものになってしまう。
  - シンボリック・インタラクシヨニズムとの違いはほとんど見いだせない。[ニシオ；竹中 1969]
- ② <分析方法>現実には、調査者が分析対象者と完全に同一化することは不可能であり、「行為者主観」を徹底することはできない。
- 逸脱者に同化してしまえば、社会学的な分析が不可能になり、一方的な説得になってしまう。
  - 場面を混乱させても、見えて来るのは常識の一部であり弊害が多い。  
[下田 1978: 115]<sup>43)</sup>
- ③ <社会学における位置づけ>エスノメソドロジーは、ミクロな状況を扱っているだけで、「パラダイム変換」とは言えない。

結論を先に出すと、以上のような表層的理解とそれに対する批判は、完全に誤っている。このような論文は、断片的にテキスト中の用語を利用しているか、H. Garfinkelなどのテキストをほとんど読まないまま想像で書かれている。エスノメソドロジーが「主観的解釈過程の分析」や「行為者主観の記述」を行っているといった、原著や適切な解説を少しでも読めば明らかに誤りとわかるエスノメソドロジー理解が、日本の社会学という学問領域でなぜ・どのように起こってきたか、分析するというのも社会学的な課題であるように思えるが、本稿はそのような目的をもっていない。しかし、分析対象や分析方法について、シンボリック・インタラクショニズムなどとエスノメソドロジーの区別をつけることでこのような誤解は少しでも解けるように思える。次の章では、さまざまなアプローチによる同一現象の分析を簡単に紹介することによって、エスノメソドロジーと他の社会的アプローチとの差異を明らかにしていきたい。

## Ⅱ エスノメソドロジー的分析の差異化

さて、ここでは、具体的な会話についてさまざまなアプローチを用いた分析を概観し、エスノメソドロジーの特徴を描き出してみたい。<sup>4)</sup>

### 〔会話例 1〕(カッコ内は沈黙の秒数)

T 1 : 暑いねえー (2.0)

S 2 : そうですね (1.0)

T 3 : 先生が「暑いね」と言ったら、窓くらい開けなさい (3.0)

S 4 : 自分で開けたらどうですか

この会話例は、次のように理解されるだろう。「反抗的な生徒と権威的な教師との会話である」と。もちろんある現象は、様々な解釈可能なためにこれ以外の理解の方法もあるだろう。しかし、この理解に反する事実が見つからない限り、「常識」からすればこのように理解するのが妥当と考

えられる。この「常識」を使いつつさまざまな社会学的な分析が可能になり、「なぜ」こういう発言が起こったのかということが説明できるようになる。この会話例をめぐって、さまざまな社会学のアプローチによってどのように考察がなされるか、ごく簡単ではあるが、みていってみよう。

「マクロ社会学」的に考察すれば、制度、階層、権力等といった「社会全体」を説明する専門用語で、この状況を説明するだろう。そして、このような状況に至った原因を指摘し、さらには対策を提案するだろう。

「統計的手法」を用いるなら、生徒の成績、教師への満足度、生徒の親の階層、教師の担当教科や出身校などを数値化することによって、どのような学生がこういった会話をする可能性があるかを算出するかもしれない。また、「反抗する生徒の数」はどんな社会的要素と関係があるか分析して説明するかもしれない<sup>6)</sup>。

「シンボリック・インタラクショニズム」ならば、教師と生徒は、どのように互いの行為を解釈してこのような発言を行ったのか、ということを行為者の立場にたって描き出すだろう。また、この生徒と先生が以前どんなことがあって、このような会話をしたのかさぐるだろう。そして、二人の行為者の解釈内容（ストックとしての知識）を理解して、記述しようと努めるだろう。そのためには、インタビューなど参与観察が必要となるだろう。

「A. Schutzの現象学」ならば、行為者が、相手を生徒（または教師）として類型化していることを示し、その行為者の意識の流れにそって相互主観的な生活世界を描き出すだろう。また、両者の理解が得られなかったのは、レリバンスの不一致によるものだと説明するだろう。

「心理学的な手法」なら、生徒（または教師）個人が、心理学上どのようになら生活してきたか、どのように条件づけられてきたかを調査し、場面の特徴を個人の性質に還元して、この状況を説明するだろう。もしくは、ある特定の発話から、行為者がどのような心理状態かを言い当てることにより説明するかもしれない。

このようなアプローチに共通するのは、具体的な会話が、各アプローチの背後にある理論的説明の一例として扱われていることである。これらの手法で扱いきれていないのは、次々と継起していくこの場面の「会話そのものから」導き出された常識的な合理性に基づいて、参加者がどのように判断を行っているか、ということである。また、先の「常識的知識」が「その場その場で」どのように構成されているかについても扱わない。

エスノメソドロジーでは、以上のようなアプローチを可能にする常識的な説明がいかに達成されているか、ということの問題にする。特に会話分析では、この場面が、継起 (sequence) にそって、どのように「アカウント (説明) 可能 (accountable)」になるか、秩序づけられているか、この会話を形式的記述の上で分析し、記述する。それによって、先の常識的説明が可能であることをこの会話にそって記述していく。このような常識的な説明を互いに達成していくことこそ、「社会的なるもの」をその場その場で支えているとエスノメソドロジーでは考えるからである。

例えば、この会話について次のように分析が可能である。T1 の発話は、「問い」とも「依頼」ともとれる。このように、ある発話は様々に理解可能である。そのため、文脈あるいは「発話の連続した継起」にそって理解していかなければならない。これは、発話のインデックス性 (indexicality) と呼ばれる。しかし、文脈を特定化して分析することは、多元的な文脈理解が可能なることを考慮に入れると非常に困難なことがわかる。文脈というものは、いかようにも設定できるという非決定性があるからである。ところが、実際には、相互行為を行う T や S という社会のメンバーにとっては、非決定性の問題は起こらない。それは、「その場その場」の実践が行われているからである。S2 の発話を見ると、「問い」に対する「答え」を発しており、S が T の発話を「問い」として推論したことを呈示している。この「問い」と「答え」の関係を、隣接ペア (adjacency pair) という。T3 では、「問い」と理解したという文脈を利用して、「依頼」だったことを示すと共に「命令」という発話行為を行っている。これは、継起と発話の相

互反映的 (reflexive) な関係と呼ばれる。「命令」という発話の「第一ペア」に対する隣接ペアの「第二ペア」は二つあり、「受諾」と「拒否」である。「命令」に対する優先的な「第二ペア」は「受諾」であり、「拒否」の時は、この発話が顕在化し理由説明などが求められる。S4で「受諾」ではなく「拒否」の発話が行われることにより、S4の発話が顕在化し、「反抗」として理解されることになる。3秒の発話の遅れも「非優先性」を導くものである。こういった「隣接ペア」についての知識の利用法は、その場の成員が理解し、実際に使っているにも関わらず気づいていないもの (seen-used-but-unnoticed) である。

エスノメソドロジー独自の用語について若干の説明が必要かも知れないが、他のアプローチとの差異は明らかになったと思われる。

### Ⅲ 判断力喪失者 (Judgemental Dope) が示すこと

Ⅱで考察したアプローチは、さまざまな人間像を表わしているだろう。Garfinkelは、様々な理論的前提によって作り出された偏った人間像をdopeという言葉で表わそうとした。彼は、従来の理論に従えば判断力喪失者 (judgemental dope) となる人間が、「実験」により実際はそうでないことを示そうとした。その実験を詳細に見ていくことにする。

[実験1] [Garfinkel 1964: 243-246=1989: 75-79]

「定価が定められている商品を値切ってみることに」

- ① 67人の学生の課題：「2ドル以下の商品を1回だけ値切ること」
- ② 別の67人の学生の課題：「2ドル以下の商品を3回、50ドル以上の商品を3回値切ること」

[結果]

- ・売り手は、さほど動揺せず、不安を示した者も少なかった。
- ・実験を途中でやめた学生は、①より②の方が少なかった。
- ・値段交渉の駆け引きは、さまざまな段階から構成される。そのため、値

段交渉を行うときの不快感は、初めての時はいちばん高く、3回目にはすっかり失せた者もいる。

- 安い商品より高い商品を値切の方が、一般に不快感は少なかった。
- ②の学生の多くは、実際に値切ることができることがわかり、今後値段のはる商品は値切ってみることを決めたと報告した。

実験1でまず前提となるのは、共通理解が社会的に標準化されているということである。標準化されているがゆえに、それを基盤にして社会のメンバーは、何がその場面に適切であり、適切でないかを言い当てることができ、その場面を秩序あるものにしようと努めるのである。すなわち、社会の成員は、場面を見ていうことができる (observable and reportable) = 場面が説明可能 (accountable) なのである。ここで H. Garfinkel が注目したのは、社会がどのように標準化されているのかといった、標準化された期待にそっているがゆえに出て来る行為の性質や結果ではなかった。そうではなく、社会のメンバーが行為をすることによって標準化を行っていること、標準化されていることをメンバーがどのように利用しているかということなのであった。すなわち、説明可能性、正常であるとの知覚、道徳的秩序が一つの行為の同一局面を示しているということだった [北澤 1987: 207]。H. Garfinkel は、標準化の「結果」に重点をおいてしまった研究によって描き出される人間を、判断力喪失者 (judgemental dope) と呼んで、次のような問題点を指摘した。

① 文化的な判断力喪失者 (cultural dope)

- 社会学者が設定した社会の中の人間。
- 共通の文化によりあらかじめ規定されている正当的な行為だけしか選択できず、それによって、社会をいかにも安定したものにしていくのである。

② 心理学的な判断力喪失者 (psychological dope)

- 心理学者が設定した社会の中の人間。

- 精神医学上どのようにいままで生活してきたのか、あるいは、いままでどのように条件づけられてきたのかといったことにより、また精神的な作用の諸変数により、あらかじめ余儀なくされている範囲でしか行為を選択できず、そうすることで、社会をいかにも安定したものにしているのである [Garfinkel 1964:244]。

「文化的な判断力喪失者」とは、前章の「マクロ社会学」や「統計的手法」が前提とする人間像である。また、「心理学的な判断力喪失者」は、前章の「心理学的な手法」が前提とする人間像である。このようなモデルによると、メンバーによって成し遂げられた（結果としての）事柄を分析するために安定した構造が描かれることになる。この分析結果としての安定した構造を出発点とするため、社会のメンバーが、当の場面でその都度用いている常識的知識を二次的で、付帯的な現象としか扱わないことになってしまう。これに対し、H. Garfinkelは、常識的知識は、制度化されているゆえにふだんは暗黙のうちに従っているが、揺るぎないルールとして扱うことはできない、ということを示そうとした。エスノメソドロジーが「主体主義」と言われる場合、こういう主張を中心にすえているのである [北澤 1989]。ただし、個人が「主体的に」行動すれば、ルールも変えられるなどと、表層的に理解しては、もちろん誤りである。

この実験での標準化された期待とは、契約制度の構成要素としての「制度化された一物一価の原則 (institutionalized one price rule)」である。もちろん、制度化、標準化されているがゆえに、実験者である学生には羞恥、売り手には怒りや不安が伴うと予測される。そのため、ふだんは行われることはない。しかし、実験結果が示すとおり、このルールが破られようと、相互行為は崩壊せず、それどころか、相互行為は別の流れを持ち、実験者に有利な結果さえ生んだのである。

H. Garfinkelは、社会のメンバーが、文化的な判断力喪失者として扱われてしまうことを次のようにまとめた。

- ① 社会のメンバーは、ルールにしたがって行為することも、しないこ

ともできる場面では、先行きの不安を感じてしまう。それゆえ、ルールに反することをわざわざしないし、成りゆきにも任せられない、よってルールに従うと自分で語ってしまう。(行う場合もそうでない場合もあるにもかかわらず。)

- ② メンバーにとって、ルール破りの不安を克服することが実践的にも理論的にも重要であるにもかかわらず、このことを見過ごしてしまう。
- ③ 不安や恐怖という感情に妨げられて、標準化されている期待に手を加えることはないという研究者が考えてしまう。こうしてしまうと、標準化とは、本来的に課された不動のものとして扱われる。

こういったことを研究者があらかじめ前提にしてしまうと、社会のメンバーはルールによって制御されているだけのもの＝判断力喪失者として扱われてしまう。そして、メンバーも研究者も標準化されている期待が不動のものとなればされるだけ、期待が破棄される時何が起こるかを確かめる可能性を放棄してしまうことになる。

〔実験2〕 [Garfinkel 1964:245-246=1989:79-82]

「年齢、性別、面識の程度が異なる被験者を相手に、三目並べを行うこと。ただし、三目並べの升目を引いた後で、被験者を先手としてマークを書き込むように促すこと。そして、被験者が自らのマークをつけた後で、実験者はこの遊びで行われていることは、通常のものとは異なっているといった気配をいっさい示さず、被験者がつけたマークを消すと同時にそれを他の升目に記入し、そこに実験者自らマークを書き入れること」

〔結果〕

247例中半分の事例で、被験者が、実験者の行いは理解し難いが、きっと意味のある仕草だと捉えているだろうと実験者である学生は捉えていた。

被験者が確信していたことは、実験者は、自分では何も言っていないが、何か別のことに気を取られていて、「本当に」行っていることは、三目並べとは全く関係ない。例えば、相手の関心をひいて口説こうとしたとか、被

験者を非難しようとした、侮辱したといったように。

この実験で、H. Garfinkel は、次のような理論によって描き出された人間は、「判断力喪失者」として扱われていることを示そうとした。すなわち、社会のメンバーが、その場面で起こっている事柄を有意味なものとして解釈する方法を、サインとシンボルの形式的特徴として扱う理論を用いて描き出された人間が、判断力喪失者であることをこの実験で示したかったのである。

H. Garfinkel が用いた以上のような理論の第一の例は、シンボルや記号がある規範に従って一義的に解釈されるという規範的理論である。このような理論には、もともとシンボルの用法を研究者の側で限定していった理論に仕上げるものと、シンボルについての記述的理論を求めたが結果として規範的理論になってしまったものがある。前者の例としては、Norm Chomsky の生成変形文法、後者の例としては、Jurgen Habermas の理論があげられるだろう [北澤；西阪 1989: 92]。いずれにせよ、このような理論では、社会のメンバーは、研究者側の指図にしたがってメンバーが行為するように仕向けられており、結果として、メンバーは研究者の思った通りのサインとシンボルの用法を使っていることになってしまう。しかし、L. Wittgenstein の言語ゲームや A. Schutz の生活世界論によるまでもなく、メンバーによるサインやシンボルの用法は、研究者が設定する前に「そこにある」ものなのである。社会のメンバーは、研究者の側で設定された規範にしたがっているよりも、実際の関心にそって、メンバーによって設定され使われるルールを用いているのである。よって、むしろ行うべきことは、そのメンバーによるサインやシンボルの用法、メンバーの言語ゲームとは何かを問うことである。

H. Garfinkel が、第二の例としてあげたのは、標識 (mark) や指標 (indication) のような記号機能についてしか扱わず、こじつけ、代喩、引照表現、婉曲表現・皮肉・曖昧な表現について扱わない理論である。こう

いった理論を用いると、生身の人間を判断力喪失者として描いてしまう、と論じた。これは、J. L. Austinらの発話行為論でも論じられていることである。現在では、いわゆる辞書的な意味と、文脈に位置づけられた意味との区別をすることが社会学では常識となっているが、H. Garfinkelはこのことにいち早く目をつけたことになる。従来の行為に関する理論では、この辞書的な意味を本来的、一次的として、常識的知識を利用することによって比喩などとして理解される意味を二次的なものとして扱ってきた。しかし、実際の場面で起こる発話において、辞書的な意味は、二次的なものに後退し、理解される意味が一次的になる。発話は、コンテキストに位置づけられて初めて意味を持つのである。H. Garfinkelは、これを発話のインデックス性と呼んだ。

以上のようなサインやシンボルの関係は、「複雑な」用法として無視されてきたとH. Garfinkelは書いている。そして、常識的知識を引き合いに出しながら、行われるメンバー自身の判断作業 (judgemental work) を研究することを、H. Garfinkelの研究＝エスノメソドロジーのテーマにしようとした。

実験2が示すことは、次の通りである。実験者は三目並べを行っているにもかかわらず、ルールに従っていない。そこで、被験者は、状況を解釈する手だてとしてルール違反を利用している。すなわち「どうしてこの人はルール違反をしたのだろうか」というように推論を用い、「まじめにルールにしたがっているときに違反するときにはこのような行為はしない」と推論を重ねる。このように、三目並べで予期できない事態が生じたときには、常識的知識を用い、判断作業を行いながら「口説こうとした」とか「侮辱した」として実際の問題に取り組んでいったことがわかる。

〔実験3〕 [Garfinkel 1964: 247=1989: 82-83]

「家族以外の適当な人物を選び、日常会話の過程で異常なことが行われているという気配を見せずに、鼻をほとんど触れるまでに顔を被験者に近

づけてみること」

〔結果〕 報告数：79

同性・異性、親密さの程度、年齢（こどもを除く）に関わらず、実験者と被験者は、二人とも相手に性的な意図を出してしまうのかと考えられた。性的な意図を出していないことを被験者に言うてしまうことは、実験の手順では禁止されていた。このことは、逆に、実験者自身にもこうした意図を持っているのではないかという気持ちにさせた。被験者は、実験者に誘惑の意図があるのか不明瞭のため、葛藤があった。そういった感情を態度に出していかどうか躊躇したばかりか、感情を出すことにも躊躇を感じた。これは、男性同士の場合特に著しかった。実験後、状況を元通りにするのも難しかった。実験だといっても、なぜ被験者を特に選んだのか説明を求められた者もある。

この実験も、判断力喪失者についての考察である。ここで対象にされた理論は、「メンバーの活動状況におけるコミュニケーションの素地を簡略化してしまう」理論である。ここで H. Garfinkel が出した例では、理論に身体的事象を考慮にいれないために、コミュニケーションにおいて個人的な実状が含まれていることを無視して、外見や属性だけによってコミュニケーションを理論化してしまっている。

実験結果を見るとおり、相互行為場面において、身体についての制度化が見事になされていることがわかる。H. Garfinkel が限定をつけた通り、家族であれば、「鼻がほとんど触れるまで顔を被験者に近づける」という行為は、有意味な出来事として解釈されていただろう。夫婦、恋人、愛人といったカテゴリーにはいる人についても許される行為として解釈可能であろう。また、そのような人の間では、「顔を近づけない」ことが、逆に親密さの減少を表わすなどといったことを意味して、顕在化するのである。この実験のように、見知らぬ人とのコミュニケーションにおいて、身体的位置が、互いに意識されてはいないものの、標準化されていることがわか

る。このように、コミュニケーションを、研究者によって簡略化することに危険な側面があることを H. Garfinkel は強調した。コミュニケーションとは、社会のメンバー同士が織りなしていくものなのである。

〔実験 4〕 [Garfinkel 1964: 247-248=1989: 83-86]

「実験者は、上着の下にテーブ・レコーダーを隠し、他者と会話を行うこと。そして、ある程度会話が進行したところで、「ほら、見て」と言って、上着を開いてそのテープレコーダーを相手にみせること」

〔結果〕

しばらく沈黙があった後、例外なく、「What are you going to do with it? (それで何をするつもりかい)」などといった質問をした。

この実験で H. Garfinkel は次のような判断力喪失者を描き出す理論が適切でないことを示そうとした。それは、慣習的な行為を、「前もって存在している合意 (prior agreement)」によって統制されているとして、この合意によって、メンバーがその場面に適切でない行為として認知することができるとする理論である。この理論によれば、慣習的行為をするときのルールが、例えば、「礼儀を尽くす」からはじまって、「嘘をつかない」とか「人の話を録音しない」という細かいルールに分けられるとするものである。しかし、ある特定の相互行為を考えても、そこにあるルールをすべて書き出すことは不可能である。こう考えていくと、「前もって存在する合意」を仮定するよりも、実際のルールをいかに現実に適用するかという「判断作業」の方が問題になることがわかってくる。つまり、メンバーが実際には一度もその合意事項について取り決めをしたことがないのに、お互いそのことを守っている、という事実を考慮に入れるべきだろう。H. Garfinkel が示したいことは、共通理解の事項がいかに詳細に規定されていると、それが、メンバーに対して合意として扱われるには、明記された条件が、「言明されていないが理解されている等々の条項 (et cetera

clause)』を伴っている限りであるということなのである。

この実験でいうと、「二人の会話は録音されていない」という事実は当事者によって、わざわざあらかじめ取り決められた事柄ではない。被験者は、テープレコーダーを見せられたとき、会話が「二人だけで」行われていたはずのものであるとの期待が破棄された。「二人の会話を録音してはいけない」という被験者が持った合意は、その時まで、実際には存在すらしなかったものである。むしろ、テープレコーダーを見せられるという出来事があったために相互行為の中で顕在化して、「この会話の録音は何かに使われるだろう」という推論から、相互行為に新しい意味が付け加えられることになる。

ここで、H. Garfinkelが強調したいのは、合意には、等々の条項が存在するというだけでは断じてない。そうではなく、等々の条項が存在するがゆえに、合意がメンバーによって共通理解として働くことである。この等々の条項がメンバーによってお互いに利用でき、現われて来る具体的な現象を共通理解によって解釈できることこそが合意ということなのである。すなわち、

「分有化された合意 (shared agreement)」とは、さまざまな社会的方法を、メンバーの認識を達成するために参照することである。そのメンバーの認識とは、何か「ルールにそって言われた」ことであり、実質的な出来事の明かな一致ではない。共通理解の適切なイメージは、それゆえ、重なっている要素の共通の部分と言うよりも、操作 (operation) なのである。[Garfinkel 1967: 30]

#### IV エスノメソドロジー vs. 「意味学派」

最後に、エスノメソドロジーといわゆる「意味学派」の差異についても少し詳細に論じてみたい。エスノメソドロジーの特徴に、インデックス性と呼ばれる発話や行為の文脈依存性を指摘する機会が多い。これを今まで強調し過ぎたためにシンボリック・インタラクションニズムなどの区別

がつきにぐくなったようにも思われる。すなわち、エスノメソドロジーは、行為の文脈依存的な「主観的意味内容」を分析するから「意味学派」に含まれるのだと。このようにして、シンボリック・インタラクショニズムや Erving Goffman の社会学、A. Schutz の現象学などと共に、エスノメソドロジーは、「意味学派」の一つとされてきたのだが、ここでは、それが誤った認識であることを示していきたいと思う。

「意味学派」のアプローチに共通する視点によれば、相互作用場面のある文脈において諸行為者は、相互に「意味」を解釈しあいながら社会的世界を構成しつつ行為を行っている。そのため、相互作用場面がどんな文脈であるのか判断することから分析をはじめることとなる。例えば〔会話例 1〕では、「学校」という文脈を特定化してから分析を始めるのである。また、秩序問題を扱う場合には、行為者が主観的に意味づけた社会的世界がどのように秩序づけられているのかが問題となる。知識を扱う場合には、その行為者にストックされている知識が問題となる。よって、分析の結果は、その場面の行為者に確かめることによって妥当かどうか判断される。もちろん、行為者のうちでも個別には極端な人物もいて、研究結果に全く同意しない場合もあるが、その文脈において典型的な行為者が行う解釈作業が記述できれば、その分析は適切であると判断される。

ところで、〔会話例 1〕だけを目にした場合に、「正真正銘の」文脈が特定化できるだろうか。例えば、これが舞台上で行われているとすればどうなるだろう。S と T は、役者であり、芝居をしていることになる。また、「ふざけあっている」という文脈を与えることによって、親密さを示し合っている場面とも解釈できる。実際の現象を分析するという段になって、「意味学派」は、自らの理論的立場により、常に解釈の多元性の畏が待っている。「意味学派」は、現象をシステムティックに「分析」するための方法ではないのである。エスノメソドロジーは、意味解釈を問題にするというよりも、発話や記述の中で連鎖的秩序がいかに示されるかということ进行分析していく。特に、会話分析は、具体的な発話現象をシステム

ティックに記述しようとする試みである。すなわち、「意味」そのものではなく、「意味」が達成される場面の特徴こそが問題とされるのである。

エスノメソドロジーと「意味学派」の差異が明らかになるのは、次のような会話例が示された場合だろう。

〔会話例 2〕(カッコ内は、沈黙の秒数 [は同時発話])

T 1 : 山田くん

→ (2.0)

T 2 : 山田く

S 1 :            [ あ すみません ポーっとしました

この矢印の部分でSは何を解釈していたのだろうか。あるいは何も解釈していないのだろうか。行為者による解釈という問題を持ち出してしまうと、このような局所的な活動 (local activity) についての分析は不可能になる場合が多いのである。

エスノメソドロジーは、行為者による解釈がどのように構成されていくかを問うために、「行為者の解釈」それ自体を問題にしていくのではなく、相互作用自体の局所的な活動を問題としていく。これによれば、矢印の部分は、「呼び掛け」に対する「返事」の欠如としての沈黙である (隣接ペアの第二ペア欠如)。この際にSがどのように場面を解釈しようとするか、この沈黙は、Sに帰属することになる (非優先的な第二ペア)。それは、二回目の「呼び掛け」の時にSが、すぐさま理由説明したことからも分かる。このような一連の「場面を見て言える (observable-and-reportable) [Garfinkel 1967: 1] 作業は、アカウンティング実践 (accounting practice) と呼ばれる。エスノメソドロジーは、行為者の解釈の次元ではなく、相互作用の継起中から導き出される「アカウント」の次元で分析するのである。この会話内の矢印の部分は、解釈としては特定できなくとも、アカウントとしては、「Sによる返事の欠如」なのである。「行為者の

「解釈」としては意味を持たない発話も「アカウント」として見れば、何を表わしているかが分かってくる。このような手続きを行えば、実際の、自然に発生する社会活動の起こる詳細な方法が、形式的記述に従属可能となってくると考えられたのである [Sacks 1984: 21]。

エスノメソドロロジーにおいて、場面に登場するのは、動機づけされた実体的な「行為者」というよりも、アカウントの成り立つ言語共同体の「成員」とみなされ、意味の規定される「文脈」が特定される前に、発話や記述の連続という「継起」において分析がなされる。さらに、発話や記述は、ある出来事を記述するものだけでなく捉えられるのではなく、それ自体がアカウント可能 (accountable) な局所的活動 (local activity) として捉えられ、「行為」となるものとされるのである。こう考えると、前に示した、H. Garfinkel によるエスノメソドロロジーの定義も理解可能になるのではないか。今までの議論によると、次のような対比を行うことができるだろう。

「意味学派」とエスノメソドロロジーの概念の対比

「意味学派」	エスノメソドロロジー
行為者 (actor)	成員 (member)
行為 (action)	活動 (activity)
解釈 (interpretation)	アカウント(説明)(account)
文脈 (context)	継起 (sequence)

このように、エスノメソドロロジーは、成員 (ethno=member) が「いまここ」で使っている方法 (method) を記述しようとする研究 (-ology) である。以上の考察で、エスノメソドロロジーが「意味学派」とは一線を画していることがわかるだろう。さらには、エスノメソドロロジーが今までの社会学と違い、社会現象を resource として扱うのではなく、topic として扱っていることが明確になるだろう。

以上の考察をもとにしつつ、エスノメソドロロジーを再定義してみよう。

「いま・ここ」に何が起きているのか、場面の成員には、「説明可

能 (accountable)』であり、こういった場면을継起的に秩序化し、説明可能にする「相互反映的な (reflexive)」メンバーの手続き・プラクティスを方法的に記述していくのがエスノメソドロジーである。そのためには、場面に表出した (または、表出させた) 具体的な出来事 (会話のトランスクリプト、記述) の連鎖を分析することから「常識的知識」を考察する。

すなわち、H. Garfinkel の言葉によれば、

エスノメソドロジー研究は、日々の活動 (activities) を、ごく普通の日々の活動の組織として「全ての実践的な目的のために明らかに合理的で報告可能」にする、つまり、「アカウント (説明) 可能 (accountable)」にするメンバー (members) の方法として分析する [Garfinkel 1967: vii]。

## 註

- (1) エスノメソドロジーの初期紹介者にも、このような表面的理解があった。加藤春恵子は、エスノメソドロジーを「秩序問題」を扱い「自明性を問う」としておきながら、一方で、「一個人の意味付与活動」に焦点を当てる研究であると述べた [加藤 1978a: 17]。さらに、「個々の社会についてのあるいは集団についてのエスノメソドロジー [加藤 1978b: 171]」というように、エスノメソッドを実体的な集団の背後知識と考えていたようである。「個人」の意識の中にどのような意味が付与されているかということは、主にシンボリック・インタラクショニズム (S I) の行ったことであり、加藤の分析も S I といえるものである [加藤 1978a: 16 & note(3)]。エスノメソドロジー (H. Wood のような特異なエスノメソドロジー研究者は除く) が相互行為を扱う場合は、相互行為自体の形式に注目するものであり、「個人」の意味付与は問わない。加藤流のエスノメソドロジー理解が、今回述べたエスノメソドロジーの表層的理解および表面的批判に直結したの言うまでもない。また、加藤は、エスノメソドロジーが言語に注目した社会学だということを全く見逃している。(ただし、加藤のような主張をしていたエスノメソドロジー研究者は、1970年代前半ごろまでは少数だが存在した)。
- (2) 『社会学小辞典』には、さらに「研究者が現実との関わりの中で、自らも対象化され、客体化される側面を重視する」としたり「提唱者シュエツ」とするなど明らかに誤った解説がなされている。1992年版では一部改稿された。

- (3) 下田は、初版で、エスノメソドロジーでは「普遍妥当的真理の発見に向かうことは、およそ期待できそうもない」とし、「誤解」の研究はできるが、「このアプローチでは、人々の人々による説明以上のものは何もできてこない」としている。増補改訂版では、「実験社会学」としての可能性を示唆し、「人々の常識的反応や常識的説明以上のものを観察したり分析したりすることができるのかどうか、いささか疑問に思えるのである」と留保を与えている〔下田1981:115〕。しかし、どちらにせよエスノメソドロジーの表層的理解に変わらない。
- (4) H. Sacksの主旨に従えば、実際に起こった会話の記録でなければいけない。しかし、実際の会話ではなく、会話のトランスクリプトにする以上、「トランスクリプトという記述」の継起的秩序として分析可能であると考えたため、ここでは、作成した例示でよいと判断した。〔2〕も同様。
- (5) 統計的手法を社会学で用いる際には、次のような重大な問題点を引きずってくることになる。すなわち、行為 $Y=f$ (行為 $X$ )という関数関係と、行為 $X$ と行為 $Y$ の因果関係の間には、厳密には／論理的には全く関係が無いということである。さらに、関数関係と因果関係を結びつけるには、常識的推論(による厳密性・論理性の排除)に頼らざるを得ないということである。

## 参考文献

江原由美子；山岸健編

1985 『現象学的社会学』三和書房

Garfinkel, H.

1964 "Studies of the Routine Grounds of Everyday Activities", *Social Problems* 11: 225-250

=1989 「日常活動の基盤」in サーサス他

1967 *Studies in Ethnomethodology*, Prentice-Hall

浜日出夫

1985 「シュエツと『意味』の社会学」in 江原；山岸編

濱島他編

1972 『社会学小辞典 増補版』有斐閣

加藤春恵子

1978a 「日常における意味付与活動」吉田民人編『社会学』日本評論社

1978b 「社会的相互作用への現象学的接近」『社会学評論』29(2): 15-27

ニシオ, ハリー；竹中和郎

1969 「アメリカ社会学における現代的課題」『社会学評論』20(1): 73-90

北澤裕

1987 「日常生活世界と背後期待」山岸健編『日常生活と社会理論』慶應通信

1989 「現実社会の構成とエスノメソドロジー」『社会学評論』40(1): 82-95

サーサス, G. 他 北澤；西阪編訳

- 1989 『日常性の解剖学』 マルジュ社
- Sacks, H.  
 1963 "Sociological Description", *Berkeley Journal of Sociology* 8: 1-16.  
 1972a "An Initial investigation of the Usability of Conversational Data for Doing Sociology" in Sudnow, D.(ed.) *Studies in Social Interaction*, Free Press. = 北澤; 西阪編訳 1989 「会話データの利用法」 in サーサス他  
 1973b "On the Analysability of Stories by Children" in Gumperz, J.; Hymes, D. (eds.) *Directions in Sociolinguistics*, Blackwell.  
 1984 "Methodological Remarks" in Atkinson; Heritage(eds.) *Structures of Social Action*, Cambridge Univ. Press.
- Sacks, H; Schegloff, E. A.; Jefferson, G.  
 1974 "A Simplest Systematics for the Organization of Turn-Taking for Conversation", *Language* 50: 696-735.
- Schegloff, E. A.  
 1989 "Harvey Sacks - Lectures 1964-1965", *Human Studies* 12: 185-209.
- Schutz, A.  
 1973 *Collected Papers I*, Murtinus Nijhoff=1983 渡部他訳 『社会的現実の問題 [1]』, 1985 『社会的現実の問題 [2]』 マルジュ社。
- 下田直春  
 1978 『社会学的思考の基礎』 新泉社 増補改訂版は1981
- 山崎敬一  
 1985 「人間のカテゴリー化について」 『文学研究紀要』 別冊第12集哲学史学編
- 山田富秋  
 1985 「プラクティスとしての文化」 in 江原; 山岸編
- 好井裕明編  
 1992 『エスノメソドロジーの現実』 世界思想社
- 吉田民人編  
 1978 『社会学』 日本評論社

## RETHINKING "ETHNO-METHOD-LOGY"

## 《Summary》

Mizukawa, Yoshifumi

It has been more than twenty years since "ethnomethodology" was introduced to Japan, and a substantial amount of ethnomethodological research is being conducted today. However, even to this day, a superficial understanding of ethnomethodology is prevalent. This paper criticizes this situation in four steps.

First, papers which demonstrate only superficial understandings of ethnomethodology are introduced and criticized. These papers are not based on concrete understandings of ethnomethodological study. Rather, the writers seem to allow their own shallow interpretations in directing their argument, which shows their "ethnomethodology-phobia".

Second, the differences between ethnomethodology and other sociological perspectives are presented. The phenomenon of conversation is examined to demonstrate the analyzability of ethnomethodology.

Third, H. Garfinkel's experiments are closely re-examined to show how ethnomethodology differs from other sociological perspectives. These perspectives treat human beings as "judgemental dope" whereas ethnomethodology has a totally radical perspective to human beings as "the social".

Lastly, this paper presents how ethnomethodology is different from the so-called "meaning school" (symbolic interactionism, phenomenological sociology, etc.) which has, as the object of its study, the meaning of the world as interpreted by the actor, or self. Ethnomethodology is interested in the method, how members accomplish their everyday activities, in its own right, rather than in the interpretation process.

Therefore, ethno-method-ology is the study of social members' methods.